



Title	大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狭衣物語』巻四・翻刻と解題（下）
Author(s)	小林, 理正
Citation	詞林. 2020, 67, p. 1-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75582
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狭衣物語』卷四・翻刻と 解題（下）

小林 理正

はじめに

本稿は、前稿「大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狭衣物語』卷四・翻刻と解題（上）」（『詞林』第六五号、平成三十一年四月）に続き、大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狭衣物語』（以下、元斎本）の卷四後半の翻刻を行うものである。これにより元斎本卷四の本文全体が確認できるようになったことになる。

一、元斎本と流布本の差異

元斎本卷四の本文を流布本である元和九年本や承応版本の本文と比較すると、異同が認められる。このことは前稿でも指摘したとおりである。たとえば、本稿における範囲においても、元斎本に

あそひ給につけても又まことしきことふえ文のかたにつけても花四葉山のおもしろき春夏秋冬につけてもをのくつかさくらゐをのそむ事もこなたに申は何事もこよ

なう身のうれへを思ひをかなへ給かたさまもあけくれむかひ見たてまつらまほしき物におもはれ給て（七八丁裏）七九丁表¹

とあるところ、元和九年本には

○元和九年本・卷四之上・六九丁裏く七〇丁表²

あそひ給ふにつけても又まことしきかた物をならひをのく身のうれへ思ひをかなへ給ふかたさまもあけくれむかひ見奉らまほしき物に思はれ給ひて

とある。元斎本と元和九年本で囲み表示部が共通している点を踏まえると、二つの囲み表示部の間にある斜体の本文が対応関係にあるとわかる。では、この元斎本の斜体本文は如何なる性格のものなのであろう。挙例部は三谷榮一が卷四本文の検討において取りあげたことのある箇所でもある。三谷論稿を確認すると、当該本文は第二系統本文（異本系本文）と認定されている。三谷により「第二系統」伝本とされた為秀本当該部の本文を掲げること、元斎本本文との差異を確認

しておく。

○ 為秀本・九三丁裏〜九四丁表^①

いますこしこの御かたをは心ようひしてことふえふみの
かたのかたにつけても花もみち山のおもしろさ春夏秋冬
につけても又をのつからつかさくらのなることもこな
たに申はなることこよなう又さらに身（マ）のうれへもみた
てまつるにいのちのひゆく御ありさまなれば

いくつか異同が認められるが、為秀本と元斎本の斜体本文
が同根のものであることは明らかであろう。したがって、元
斎本の挙例部本文は流布本系本文の中に異本系本文を混雑し
たものであるとわかる。「紹巴予本が流布本の原型^⑤」との見
解を提示した先行論にしたがえば、元和九年本は紹巴本の一
本・元斎本から異本系本文の箇所のみを取り除き、本文を整
えたことになる。しかし、如上の想定が成り立つならば、し
いて紹巴本に「流布本」の原型を見ずとも元和九年本の本文
は発生しうることになる。元斎本の有り様を踏まえるかぎり、
「流布本の原型」に紹巴本を見る必要はないのではないか^⑥。

ところで、かつて鈴木一雄は「古活字本（元和九年本…稿
者注）の底本として紹巴本、京大久田本、藤浪本などが考え
られている」と指摘していた。挙例部を京大久田本・藤浪本
を含めて確認すると、京大久田本は本行本文が元和九年本と
同様だが、「をのく身の」にミセケチ点を施したうえで、「物
をならひ」と「をのく身の」の直後に補入記号を付し、元

斎本・為秀本の斜体本文を記している。藤浪本は元斎本と同
様である。鈴木の挙げた伝本群から流布本狭衣物語の本文を
みつめると、元和九年本の本文は京大久田本からのみ生じる
ことになる。京大久田本が紹巴本と接触したか否は未詳だが、
これまで充分に検討されてこなかった京大久田本とのみ流布
本の本文が一致する実情は看過してよいものではあるまい。

なお、このほかにも紹巴本、京大久田本、藤浪本の三本の
中で京大久田本が流布本と重なる事例を確認している。これ
まで鈴木の言及は顧みられることがなかったが、京大久田
本・藤浪本を加えたうえで、流布本狭衣物語の本文を読み解
いていく視座が必要であるといわねばなるまい。この点につ
いては別稿を期したい。

前稿の翻刻に稿者の目移りによる脱文や字形類似に因る翻
刻ミス、ならびに助辞の見落としなどの誤りが多数確認され
た。この場を借りてお詫び申しあげる。正誤表は【表一】と
して後掲した。ご確認いただいたうえ、前稿本文の修正をお
願いしたい。

【注】

- （1）元斎本の本文は原本の撮影写真に拠る。
- （2）元和九年古活字本の本文は三谷榮一『古典資料類従7 元和
九年心也開板古活字本』（勉誠出版）に拠る。
- （3）三谷榮一『狭衣物語の研究「伝本系統論編」』（笠間書院、平

成（一二年）。初出は昭和三七年。

（4）為秀本の本文は『静嘉堂文庫所蔵物語文学書集成第一編 古物語』（雄松堂フィルム出版、昭和五六年）に拠る。

（5）川崎佐知子「紹巴所用『狭衣物語』とその意義」、『狭衣物語』享受史論究』思文閣出版、平成二二年。初出は平成一三年五月。

（6）たとえば中田剛直は「狭衣物語卷一伝本考」（『国語と国文学』第三五卷五号、昭和三三年五月）において、「紹巴所持本を写した天満宮本若くは毛利元康本そのものに拠れるかは別」としながらも流布本の原型を「連歌師間に所伝せし一本に拠れる事は間違ひないであらう」と述べている。

（7）『新潮日本古典文学集成 狭衣物語上』（新潮社、昭和六〇年）。

【附記】

貴重書の閲覧、ならびに翻刻掲載許可のご高配を賜りました大阪天満宮御文庫、ならびに関係各位に衷心より御礼申し上げます。

（こばやし・ただまさ 本学博士後期課程）

【表一】 前稿正誤表

	誤	正	所在	その他
1	このかはら色はめつらしく	このかはらぬ色はめつらしく	一五丁ウ・三行目	当該本文が第九行トナル
2	三千大世界	三千大千世界	一七丁オ・九行目	
3	こそそのなかにも	こそそのなかにも	一九丁ウ・九行目	
4	山かへるとや	山かへるとかや	二〇丁オ・七行目	
5	そと、はせ給へは	そととはせ給へは	二四丁ウ・六行目	
6	み、ととめ給へる	み、と、め給へる	二五丁オ・八行目	
7	をしか、りて経よむ人	をしか、り経よむ人	二六丁オ・一行目	
8	た、独かしつき	た、ひとりかしつき	二七丁オ・六行目	
9	あらずなしたるに	あらずしなしたるに	二七丁ウ・九行目	
10	すくれたりける	すくれたりけるふるめきにけるそいとくちおしう	三二丁ウ・八行目	
11	中将ほのみてすかせ給にこそ侍けれ	そおはされける中将ほのみてすかせ給にこそ侍けれ	三二丁ウ・八行目	
12	御いかほとに	御いかのほとに	三三丁ウ・三行目	
13	まいり給へければ	まいり給へれば	三六丁オ・一行目	
14	ありつる返りこと	ありつるかへりこと	三八丁オ・五行目	
15	むかしより聞、そめて	むかしよりき、そめて	四〇丁オ・一行目	

27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
思ふなりおひ人ひ	まてた、しのひやかに	まつりてうちゑみ	ありぬやう見ない給て	まゝにありあけの	えかよひはや	かゝ御せうそこ	見くるさをそ	いとゝのおりゆかしう	さらんとくちおし	人こそ見えね秋の	さかり御身やつし
思ふなりおい人ひ	まてはた、しのひやかに	まつりてうちゑみ	ありぬへう見ない給て	まゝにはありあけの	えかよはずや	かゝる御せうそこ	見くるしさをそ	いとゝのこりゆかしう	つらんとくちおし	人こそ見えねあきの	さかりの御身やつし
七三丁ウ・一〇行目	七三丁ウ・一〇行目	七三丁オ・八行目	六一丁ウ・九行目	六〇丁オ・六行目	五八丁ウ・九行目	五六丁ウ・五行目	五五丁ウ・三行目	五三丁オ・二行目	四七丁オ・二行目	四六丁ウ・四行目	四二丁ウ・三行目

【翻刻】

【凡例】

- 一、底本は大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆本『狭衣物語』（請求記号・三〇——）巻四の写真版を用いる。
- 一、本文は原本の体裁を可能な限り尊重するものとする。丁移りを「」で示し、丁数と表裏を「（○丁オ（ウ）」と記す。なお丁数は墨付き丁数である。
- 一、変体仮名はすべて現行の平仮名に改める。また「ハ／ニ／ミ」は「は／に／み」とし、旧字体、異体字は通行する字体に改める。
- 一、ミセケチはすべて「取り消し線」で示す。
- 一、削訂の場合「X（Y）」と表し、削られた文字を丸括弧内にいれて示す。
- 一、傍記は、該当本文横に記す。なお、補入記号は「○」で示す。
- 一、損傷本文と思われる表現も原本にはあるが、すべてそのまま翻字する。
- 一、今回は前稿の続き、七四丁オより以降を翻刻する。

とりそくしたるをありつくへきやうに物せよとの給を聞ほとはた、うちゑみて殿うへもなにしにかきこえさせ給はむいかにも（御心と、めさせ給はん人をはいかでとこそこのたまはすれまいてあななたしけなやいかにおほしめしよろこはせ給はんものをあなうれしやおもふことこそなくなり侍ぬれと聞ゆれは心と、まりなとたちまちにさたむへきならねと心ほそけなめる人なればなにかは心やすからす物むつかしき世中のなくさめにもとおもふなりとかたらひをきてわたり給ぬるまにそ大貳ちかくまいりよりて御木帳のかたひらひきあけて見れば御ふす

「（七四丁オ）

まのしたにうつもれて人おはすとも見えぬに御くしはかりこちたけにた、なはりゐていと所せけるいよもなに事もなのめにおはせん人をかくまでもてなし給はしとはおもひつれとうちみるはなをおとろかるればよりてひきのへてすそうちやりたるにまことにをくれたるすちなしとはこれをいふにやと見えてとかくもすへるつやすちのうつくしさなどのさい院の御くしにいとよくに給へりなかさすこしおとりてやと見ゆるは御としの程にしたかひ給へるにやとみるにかうおとろききこゆるけはひをき、て弁のめのとよりたればとの、御けしき

「（七四丁ウ）

また見奉りしらぬさまに見えさせ給へるかめつらしきに

おとろかれ侍てちかうまいり侍にことはりにこそとこの御くしはかりにまつ思ひ給へなりぬよと、もに世中をた、よはせ給てあけくれとのうへの御まへよりはしめまいらせわたくしの心きをもとはし侍りてた、すこしのほたしにおほしとまりぬへからん人を見き、いてはやとからくにまでもたつねまほしけにおほしさはくめる御いのりのしるしにやとかへす／＼むねやすまる心ちし侍てなむまいてうへの御まへなときかせ給は、いかばかりおほしよろこはせ給はん物を一品宮わたりに

「（七五丁オ）

きかせ給はんにこのころはおりさへいとおしうなとこそこの給はせつれなと君の御心のうかれまとひて露はかり心と、め給人もなくてさはかれ給へる年ころの御物かたりこまやかにかたりいて、よろこふにけにかはかりまておほしと、むる事なかりつらんにあすのふちせはしらすけふはかりにてもいかなる御すくせにてかは人もかう見しり給はかりの御けしきにもとうれしさををろかならねといとさはかりならん御心のうちなきさやうはありかた／＼こそ侍へかなれとしころもかやうなる御けしきとはうけたまはりなからき、しま、たつねとるらんあまたの

「（七五丁ウ）

つらにてははいなしやとのみおほしつ、むめりしほとにあさましう打すてきこえさせ給てしのちいくらばかり

のほとをたにもへすあくかれいてさせ給ひぬるいかなることにかとほれ／＼しき心ちし侍てなむ皇后宮よりもきこえ給やうも侍しをかうわかぬ御ことにしも物せさせ給てつゐにいかなる事侍て身つからの浅ましうもてなしきこえたるにかなり侍らんとやすきそか侍らぬにいと、御物かたりともにしたくつれたる心ちし侍れといふさまもいとめやすき人さまなりあなまか／＼しやおほろけにおほしさためたる御心には

「（七六丁オ）

侍らしよし見奉り給へ春宮にまいらせ給へらんにおとりたる御ありさまによもてない奉り給はしなと心をやりていひちらしつ、御くしをうちもをすすめてゐたりまことにさい相はきのふはわたり給はすなりにしにおほつかなさにふみたてまつれ給ほとに大將殿より御文あるをまつ見給へはにはかなるやうにもおもひ給へしかとみに日は日つゐてもよろしからす侍しかはよへなむこの侍ところにわたしきこえさせてし弁なとはさはかれきこえなむとていみしうおち侍しかとやすくふみわけ給へるあと、もみえ侍ら

「（七六丁ウ）

さりし庭のけしきも見をきかたくおもふたまへられしかはなむかんだう侍ましうはゆふつかたたちより給へ身つからきこえんなどやうにその給けるさこそ

はとおもひつることなれといとはかにかる／＼しき
さまにてわたり給にければくちおしうおほゆれといて
さはれ中／＼まかせたてまつりてんかしうちなとにき
かせ給はむこともひんなるへければことさらにしのひ
たるさまにもてなさむとし給ならむとおほせは
御返事にも月ころわつらふこと待つる人のこの五六日は
いたうくるしかり侍れは見たまへあつかひてふる郷も

「（七七丁オ）

いと、あらし侍りつるにたちよらせ給けるをなむおとろ
き給ふるさてもなとか御前にはめすましきなど聞え
給へり弁のめのもとにもにはかにわたり給にける
あさましくなどの給はせてふち衣なれとなへて
ならすきよらなるともたてまつれ給へりひめ君にも
かうなむふ見侍るときこえさせていみしうなき
しほみ給へるきかへさせたてまつりなとす家は
けさよりつくるひたりつれとみつはよつはにか、
やくやうなる殿つくりのしつらひありさまよりはしめ
さふらふ人／＼のなりかたちなどのおほろけの人さし

「（七七丁ウ）

いつへくもあらずめてたけなれは水鳥のみきはにたち
いてたる心ちしていとわりなしおはいとの、おはします
かたよりはへちに五けん四めむなるしん殿こイたいらうわた
殿なとみなこの御かたの女房のさうしさふらひくら人所

なとにせさせ給へるなるへし庭のまさこのしろかね
かと見えたるに木草のた、すまひまでもはねてならず
みゆる枝さしに吹よる風のをとなひもおもしろくいみしう
てこの世とはおほえぬ松の木たちありさまをみかとの
ほかより見いれてもこのうちにあけくれさふらふ人の
なに事をおもふらんいかなるさまなる人か、るありさま

「（七八丁オ）

すらんなどおもひやられしを身のうへになりて見いたしたるは
身をかへたる心ちのみそするたかきもくたれるも天下にす
こし人なみ／＼にかすへしらるゝきはほうしそくは明くれ
たちかひつゝ、いかなるわざをしていさゝかも御覽し入れん
と心をつくしてあしたゆふへのいとなみにまいりつかふ
まつりてもなにはかりのめてたきことなかつた、一こと葉も
物なといひふれ給をかしこくうれしきことにてやむこと
なきかむたちめなともうちわたりの宮つかへよりも
まつ／＼とまいり給つゝ、日をくらし夜をあかし給につけ
ては又いますこしこの御かたにまいりようし給そことはり

「（七八丁ウ）

なるやあそひ給につけても又まことしきことふえ文の
かたにつけても花四葉山のおもしろき春夏秋冬に
つけてものを／＼つかさくらゐをのそむ事もこなたに
申は何事もこよなう身のうれへを思ひをかなへ給かた
さまもあけくれむかひ見たてまつらまほしき物におも

はれ給てもてかしつかれ給へるありさまのうつくしう
めてたきをはさる物にてこゝら見る人のなかにもこの
御かほかたちけはひありさまにたゝ夢はかりにても打
なすらふへきかこの世になかりけるよとあけくれすくる
日数にぞへつゝ見奉るたひことには若君のすくせは

「（七九丁オ）

人にはまさり給へりけりとのみ思ひしらるゝにみ奉りて
のちはよひのほととたにたちかくれ給おりもなく
まれくも一品宮はかりにうちかよひまいり給もあかしも
はてすひるまのほともくらしかたけなる御けしきを
見るにつき草に聞たてまつりし御心のうしろめ
たきなれと思ひしよりもすきたる心ちのみするに人さ
のすきにしかたの物かたりなとをきくにそなをいと
あやうくも又たのもしくもありける殿うへは御けしき
のすこしよのつねなるをたゝ御いのりとものかなふなめり
とうれしうのみおほさるれば宮によるむけにとまり

「（七九丁ウ）

給はぬこともうちくにはなけき給つゝえ申給はぬに
わか宮大将の御かたには齋院ににたてまつりたる人そある
みやのひめ君にやあらんされはまろをはふところ
にもよるはねさせすとうらめしけにおほしての給
をあやしときゝ給て大貳のまいりたるにうへま
まことかさることやととひ給へるははしめよりの

ことゝもをきこえさせてとはせ給はさらんかきりは
なにか申すよからぬことゝこそさいなみ給はめと
の給はすれはきこえさせてなむ宮にはいとゝ物
うけにおほしめしてよしなきありきなどいままはせ

「（八〇丁オ）

させ給はすこやうかつきたる御けしきに見えさせ
給へはうれしく見奉り侍なり御かたちなとこそ
よき御あはひにみえさせ給へさい院にそあやしき
にたてまつらせ給へるなとかたりていとめてたしと
思ひきこえたるをきゝ給御けしきもけにいとうれ
しけなりなとさの給ともみつからひとりにはいまゝて
の給はさりけるかすならさらん人のきはにてたにす
こしも哀とおほしたらむはをろかにもえ思ふましきを
まいていと心くるしき御ことにこそあなれにはかに
わたり給ていかにつゝましくのみおほさるらんとときこえ

（八〇丁ウ）

あつかひ給ほとに殿わたり給てなにことそとの給へは
しかくゝのことありけるをいままでしらさりけるか
あやしさかの御心ひとつに思ひあつかひ給ふらんもほい
なきことなりやとの給へはいみしうきゝおとろき給て
すへて大貳か心なむくちおしきなりみつからこそうちに
きかせ給はんことなどによりてさもつら見給はめさり
とてもそれにしたかひてそこにさへしらすかほつくり

てあるへきかはそのとにもあるらん人も宰相もいかに
あやしき思ひのほかなるやうに思ふらんとていみしうむ
つかり給てさるへき人／＼めしつゝ、御しつらひもの／＼

（八二丁オ）

しくてうとなともひきかへあらたむへきさまにの給は
せなどしておほしをきてもてかしつききこえさせ給へる
さまかきりなき物におもひきこえさせ給へる斎院の

御心さしにおとり給へくもなかりけりとまりし人／＼も
又さらぬも心となるもかすしらすまいりつとひ宰相も
おもふさまにいて入見たてまつり給にこ宮おはしてかきり
なき内まいりにおほしたちた、ましもえかうしもやと
おもふさまにおほさるゝにもうしろめたくいみしき

物にみをきたてまつりてきえはて給し人の御心の

うちおほしいうつるはいとくちおしうおほえ給けり大殿は

「（八二丁ウ）

かくもてかしつき聞え給ても一品宮にまいり給ことの

かたきはいとかたしけなくあるましきことにおほさるれば

さるへきおり／＼に御けしきとり給つゝ、なを人め

こよなかるましきさまにてもなしきこえ給へくをしへ

きこえ給をみつからの御心にも心にまかせてもえある

ましき身そかしとみなおほすことなれとうちきくに

はいてやとてもかくても身のくるしかるへきすく

せそかしとおほすに物も申給はすかしこまりてまめたち

給へるを又さそおほすらむかしと見奉り給にはあな
あちきなやかうまでうつゝ、人にてみるへかりし人かは

「（八二丁オ）

これよりあるましき心をつかふともつゆはかり心にも
しくおもはむことをいふへきならすなどおほせはたゝ
すこし物おもひなくさめたる御けしきなるをめてたく
うれしくたれもおほしてかけてたにきこえ給はさり
けりされともよりかよひまいり給し夜のかすはかくて
のちとてもかはることなうもてなし給へるをたゝつね
のことにていまはたゝあてやかにてみしらぬさまにもて
なして物し給は、中／＼に心くるしうかたしけなき
かたには思ひきこえさせ給へきをあさましう打ゆ
るう夜もなくうと」はつかしうつらき物にのみおほして

「（八二丁ウ）

はかなきことのはのいらへもまれ／＼はおもひのほかに

とりなしてことすくなにいらへない給つゝ、はつかしけに

らう／＼しけなる御ましりに心よからす見をこせ給へは

月日にそへてわつらはしさのみまされはかやうの

こともとやかくやとうちかたらひいひもなくさめたて

まつり給へうもなければたゝかたみにをしこめて谷

のむもれ木にてそすくし給ける女宮もとしころは

あさましう見まうき心とおほしなからさすかにその

ことゝとりたてゝなめけにみえきこゆることもなけ

れはた、心のくせにこそは身こそつられれとおほし

「（八三丁オ）

しりて人のつらさはとかまましきにおほしめし

つるをいとかうまたしらすめてたき御なからひの

ためしにいひたてらるゝかたつかたさへいてきにたれは

いと、いふかたなうのみおほされてやかてこの御はての

ほとにあまになりてみえすなりなはやと人しれす

おほせとそれにつけても人をも身をもうらみ給て

身をすてつるためしにいま行すゑまでもいひなされん

さまの人わらはれに心うかるへきを又さりとてつゐには

たえはてむありさまをかはらぬさまにて見はてんも

いますこしおかましく我心のうちもなくさめ所なかる

「（八三丁ウ）

へしなとおほしなりてうすすみそめをはやかてたち

かふましくまうけさせ給てわたり給へるおり／＼も

すへてかくれつゝ、さらに見えたてまつり給はぬなり

けりすきにしかたはかやうなるよな／＼もさして心

とまるかたのなかりしかはこそ姫君ふところにふせ

たてまつり給又わかき人／＼とはかなき物かたりなと

うちしつゝ、まきはしあかし給しかいまはよろつに

おほしつゝ、めと見まくほしきにはいさなはれ給てさのみも

えつくりひやり給はぬをいと、あさましとのみ御心に

あまるおりは二三日なともおきあかり給はすなきし

「（八四丁オ）

つみ給へりかやうにて年もかへりぬれは大将殿の御かたは

女君の御すかたなとこそあらたまるしとても花やかなら

ねと殿の御かたにもとよりさふらひし人／＼はきぬの

色とも春のにしきをたちかかねたりさま／＼いはる

過しつるはての十五日にはわかき人／＼こゝかしこむれ

ゐつゝ、おかしけなるかゆつえひきかくしつゝ、かたみにうかゝ

ひまたうたれしとよいしたるゐすまひおかしう見

ゆるを大将とのは見給てまろをあつまりてうてさらは

そたれも子はまうけむまことにしるしあることならは

いたくともねんしてあらんなとの給へはみなうちわらひ

「（八四丁ウ）

たるにいと、いまはさやうなるあふれ物いてくるし

き世にこそとうちさゝめくもありけりわか宮そちい

さきかゆつえをいとうつくしき御ふところよりひきい

て、うちたてまつり給へはうちゑみ給てあなうれしや

宮のあまりかたしけなくおほえ給にわたくしの子

まうけつゝへかりけりとかひ／＼しくよろこひ申給も

おかしやかて申とり給てひきかくして女君のおはする

木丁のかみよりやをらのそき給をおかしとたれも見

たてまつりつゝ、しのひてわらへはあなま／＼とてかき

給弁のめのはうれしきながらさすかにあやうけに

「（八五丁オ）

おほえてかほうちあかめたるそおかしかりけるあたらしき
年のいま／＼しさにやいとくろきなどはなくてあさきの
こさうすきなとめつらしきさまにアマたうちかかねて
うへにもおなし色のむもんのおり物なとかさなりたる
もいとこは／＼しくはえなかるへきをあくまてはなやかに
なよ／＼とにほひおほくきなし給ててならひしてそひ
ふし給へる御うしろてはふきよらむ風の心もうしろ
めたう心くるしかるへうおほさるればこのつえもさし
よせこれ見給へいま、て子もたすとなけき給てまろか
こしうてとてわか宮のとらせ給へりければわひしう

「（八五丁ウ）

いたきめをこそ見つれまことならは御ためおそろしか
なることをむつかしきわさかなとの給へは御かほいみしう
あかくなしていと、うつふし給へるか世にしらすうつくし
けなるもなをあさましきまで思ふ人々に給へりける
かなと見給にいと、あさからす心さしもまさる物から
かはかりをなくさめにてやみねと神仏のをきて給へり
けるにこそはとかたつかたのむねはなをうちさはけは
女君のもちたまへる筆をとりて

たつねみるしるしの杓もまかひつ、なを神山に
身やまとひななんと人見るへうもあらずかきけかし

「（八六丁オ）

給女君のまんなやかんなやさま／＼うちとけてかい給

にかきませて

へるすみつきもしやうなどのまことにすくれておかし
けなるをうち返／＼見給にも思ひしことのかなはぬには
あらずこのかみ山のまとひはまめやかにはあるへかりし
ことかはとおほしなす御す、りにむめかさねのかみの
なへてならぬかさねてをしまかれたるかあるをとりみて
見給へは皇后宮の御ふみなりけり日ころは行ゑなう
おほつかなき事を思ひ侍つるに一日ちかきほとにと
宰相の物せしかは心やすくなりて侍れとかはそひ
柳は猶いかにそや侍りけるとて」（八六丁ウ）

おなしくはこたかき枝に木つたはてしたえの梅に
きある鶯とあるをうちほ、ゑみつ、見給てこの

しつえはこと人のいはむやうにいとからき事もの給
はせたる物かな御返しはいか、きこえ給つるときこえ給
へとはか／＼しうもいらへ給はねはまめやかに春宮い
かにやすからすおほすらんあさましきことなりやあや
まりてもゆつりたてまつらむこそほいにて侍へけれ
庭たつみ見つけたりし日なともわか物におほいたりし
物を又こよなうとりわき給へりしも人しれすくち
おしきすくせの程とはおほししるらむかしさはありとも

「（八七丁オ）

いまはなにかはさもおほすさらてもかひなからぬやうも
ありなむなとこまやかにうちかたらひきこえ給へる御
あはひみるかひありてめてたきためしにしつへき

かやうになのめならず見るかひある人をあしたゆふへに
みなつさひ給ふには過にしかたの物なけかしさもみな
わすれ給ぬへけれとわか宮のよるの御ふところあらそひ
のわか／＼しさをなくさめきこえ給たひことにもまつ
かきくもり物哀なる心の中は露はかりありしにかはる
ことなかりけりとさまかうさまにつけつ、あさましう
おもはすなる心のほとを見えたてまつりてもやみぬる

「（八七丁ウ）

かな一品にまいりそめしころほひは心のうちのかれま
とひし程をゆめのうちにもかよふたましゐあらはをの
つからしり給ひなんとたのまれしをいとみしにもにたる
とありし御てならひをいとおしくかなしかりし物からなへて
よつかぬ心のくせともおほしやすらむと思ふかたもなく
さめられしをこのころははすて山の月にはあらぬ
我心にもきこえやらんかたなうてひさしくさへきこえ
させ給はぬも又いかやうにかおほしなすらんと人やり
ならすなけかしくて御かたにひとりなかもふし給へる
ゆふくれの空のけしきとりあつめていとしのひかた

「（八八丁オ）

きにおほしあまりてれいの心ときめきにすこし
ほのめかし給へり

なかむらんゆふへの空にたなひかておもひのほかに
けふりたつ比ときこえ給へりされとれいの中納言

のすけのおほせかきはかりにてかひなきもつねのこと
にてめなれ給ぬへけれとこはかゝるへき中の契の
ほとかは我心のつらきそかしといひやるへきかたなう
わりなき心くるしきなとはた、きのふけふのことの
やうにかきくらされ給ほとはかゝるひとりゐし給つ、身を
こかし給ことたえさりけり一品の宮におひいてたまふ

「（八八丁ウ）

ひめ君おとなひ給ふまゝ、にけになへての人のゆかりとは
いふへくもあらず大將殿にもうちおほえたてまつり
給てなめのめに人のおもひきこゆへくもおはせぬあり
さまなれと宮は心つきなきゆかりとおほせはこゝろ
ひとつにまかせて哀におほしあつかふへきことをも
おほさすかはかりまてほのめき給もたゝこの御ゆかりと
心え給へは世をそむきなんのちまてなこりもとゝめ
まうきをたゝあらはしてわたしやしてましとおほすをも
しり給はすなに心なきさまのうつくしさをさすかに
哀にも人しれすおほしけりかやうなるうち／＼の

「（八九丁オ）

御けしきを御めのとたちなとは見しりたれと

とのにもつゆきこえさすへき御さまにもあらずはつ
かしけなる御けしきなればたゝ哀に心くるしき御
ことをの／＼いひあはせつゝすこしける大將殿もすこし
は心えそめ給にし御けしきなればけにいかにせましと

おほすおりくはありなからいまさらにいかにしてかはほかさまへもてなしきこえ給はんおほかたのありさまなとはとかくきこえあらはし給はねとのめならすもてなし思ひきこえさせ給つればかゝりとてもくちおしうあかぬことありぬへき御行末ならねとへたてなき

「（八九丁ウ）

御なからひにおなし心にもてかしつかれ給やうにはいかてかはあらむかたみに心のうちをもさはやかならす思ひなし心くるしうおほざるゝたひことには又むかしをおほしいてぬおりなしかならぬきはとあなつらはしかりしかとかゝる人のたくひもことになかりければ行末はしゐてもえおとしめさらまし物をなと大かた過にしかたをわすぬ御くせの涙もろさたゆへきよまなしあかぬことなくめてたき人を見給なからもかやうなる心のうちともたえすならひにけるしのひかたさの物なけかしさなとをのつからもりなははゝとのみ思ひ聞え

「（九〇丁オ）

させ給へるかひなくひめ君もうちとけにくゝへたておほかりぬへき御心と人しれす見しられ給けり大将にもひめ君をゆかしくくちおしき事とつねにきこえさせ給へれとなをあるやう侍れは今はつゐには御らむしてんなとのみ申つゝそすくし給けるあつきほとになりてはいとゝおもふあたりのすゝしきよりほかには

たちはなれかたくておきふしもろともにすこし給程に齋院にもれいならすおほつかなき日数へたゝりにけるをおほしいてゝすゝしき夕風まちつけてまいり給へれば人すくなにしつかなる心ちしておまへに二三人

「（九〇丁ウ）

さふらひける人もみなうちふしてね入たるにやをらちかくまいりよりて御木丁のそはより見いれ給へはおまへにも御とのこもりたるなりけりふたあひのうす物をたてまつりてひきかつかせ給へは御かほも身もつゆかくれなきに御くしは行ゑもしらすつやゝとたゝなはりゆきてひたいかみのすこしかゝりたるわけめかむさしなとなかゝいとかうこまやかにはひさしう見たてまつり給はさりつればめつらしくうれしくてつくゝとまもりきこえさせ給に昔より猶おほろけならす思ひしきこえさせてしけにやいとかはかりなる

「（九一丁オ）

にほひはさらにならひきこえさすへき人こそなかりけいてなを我すくせのくちおしうもありけるかなこれをわか物と見たてまつらすなりにけるよあふにしかへはとかやいとかはかりなりけむ人をしもしいひをかざりけむかしこの御身にかへんいのちはさらにおしからざりける物を心きよう見ないたてまつりける我心はおほろけならす心つよくもありけるかないまでも御身

をもひたすらなき物に思ひなさはかたうしもやはある
へきくつしおほしつゝ、けてなけしによりかゝり給て
つく／＼とぬ給へるにうちみしろきて見あはせ給へるも

「（九二丁ウ）」

あさましくいきたなさをいかに見給へらむとはつかしく
おほしめされて御かほもいとあかうなり給てやう／＼
木丁にまきれいらせ給ぬるもいとくちおしう人／＼
いまそおきつゝ、すこしいさりのきなとしつればつね
よりもいとたへかたきみたり心にまかりありきも
えし侍らてひさしくまいり侍らてなむさるは一日も
まいり御らむせられぬはいとくるしく思ひ給へらるゝ
にこそ御せんにはさしもおほしめいたらぬ物をなと申た
まへはれいよりはあやしう程へつれと御心ちはえしら
さりけり宮もひさしうはとの給はするをれいよりは

「（九二丁オ）」

待とをにおほしめしけるよかう心ことなる人のしるしとぞ
おほしつらむかしとむねうちさはき給てくるしうお
ほさるゝ、そあきなきや宮はいみしうまいらまほしう
し給へとうへのやかてけふあすわたらせ給はむに
もろともにとのみきこえさせ給へればけふもうちより
やかてまいり侍れはなと申給てすこしほゝゑみてま
ことや人しれす心ひとつに思たまへあまることこそ侍
つれあらふる神もことはりしり給に侍なれはにやとは

おもひ給へなから又中／＼なるかたしるをこそ見給へ
しかいてやされとしはしわするゝ心は神もえつけ給

「（九二丁ウ）」

はぬわさにやいますすこしあやかりやすくそなりにて
侍そらめにやといかて御かゝみのかけに御らむしくらへ
させむとてうちほゝゑみ給へるけしき大貳かいふ
とてうへのゝ給し人のことにやときかせ給へと御
いらへもなければうちなけきつゝ、

おほかたは身をやなけまし見るからになくさの濱も
袖ぬらしけりとてはてはれいのしのひかたけに
もらしいて給涙のけしきに又かきくつし心つき
なうおほしなれてなをねふたけなるけしきに
もてなしてふさせ給ひぬるに中／＼なにことにき

「（九三丁オ）」

こえさせいてつらむとくやしうおほすそのころ世中
いとさはかしうて道おほちにゆゝしき物おほくやむ
ことなき人もあまたなうなりなとし給へはあはれに
はかなきことをたれもおほさるみかともれいならす
おほされて心えぬさまの夢さかはしう見えさせ給へは
我よのつきぬるにやと心ほそうおほしめさるゝにも
つきのおはしまさぬ事をいかてかくちおしうおほさゝ
らむ大將まいり給へるに御物語こまやかにきこえ
させ給ひていのちもすくせもつきにたる心ちの

するをしらすかほにてのみすこしてこの世をわかるれ

「（九三丁ウ）

さらむことのつみふかうくちおしかるへきを大将の
あつかりのわか宮た、人になさんのほいふかしとき、し
かとむつきにつ、まれ給へる女たいにゆつりをき
もしは一世の源氏のくらゐにつくためしをたつねて
としたかうなり給へるおほいまうちきみのほうに
ゐむよりはあへなむとこそ思ふはいか、さのみいひつ、
位をおしむともかきりの命の程は心にもかなふへき
ならぬを見るおりに猶一日にても心のとかなるさま
にもなりなまほしくなんと給はするをいか、はふと
よき事としもおほされんよの中のしつかならぬ事は

「（九四丁オ）

をのつからさのみこそ侍れをのくさきの世の契の
ほともき、いれさせ給へきにも侍らす御心ちの
れいならすおほしめさるらんこそふひんにさふらふこと
なれとそは御いのちなとせさせ給てなをしつかに
こ、ろみさせ給はんこそよく侍らめあまり物さはかし
きやうにさふらひなむとそうし給てもけにはうに
ゐ給へきみこのおはせぬはいかなることにかとおほし
なけきけりうちくにはわか宮の御すくせのいとかたし
けなかりけること、もてかしつき、こえさせたまふを
大将殿はあるましき事かなとき、給へといかてか

「（九四丁ウ）

さもきこえ給はん女帝もかゝるおりや昔もゐたまひ
けむいかなるへき世にかと人しれすおほすにもかの
みねのわか松とかやいはひをき給けむおひさきのま
ことになふへきやうもあらはいかなる心ちしなむさる
ことのあらはしもまことにいけるかひありける身は
おほえなむかしかのつれなき御心にもさりともし
かてかいとむけにはおほされんなど心ひとつにおほす
につけてもさしむかひてとやかくやとかたみに心の
うちともきこえあはする世なくてすきなむは猶
返く思ふにもいふにもあまりてくちおしう心うく

「（九五丁オ）

おほされけり中納言のすけ大貳のめのおなしはら
からといへとおなし身をわけたるやうにかたみに思ひ
かはしたれとこの人の露はかりももらしたる事をは
心よりほかにちらすへきならねとなき御かけの御
らむせん事もありさはかりかくししのはせ給てすき
させ給しことを心より外に我心にしりそめし事たに
かたはらいたかりけり又入道の宮のこの御わたりには
のこりなくしりたまひたるらんとさはかりおほしめし
うたかひたる物をすゑの世にもをのつからき、あはせ給て
思のほかなりけりとおほしめされめとてもかくてもいまは

「（九五丁ウ）

わか宮の御ためにたれもをろかに思ひきこえさせ給へくはなかりけりとおもへは大貳にもこの御ことをかけてもかたらさりけり夏ふかくなるまゝ、によのさはかしさもいやまさりにてたかきもいやしきものこる人すくなけになり行つ、月日あまつほしのけしき空のたゝすまひもしつかならずあはたゝしきまゝに御かともいとゝなやましくのみなりまさらせ給へは猶わか世はつきぬるなめりとおほしめして昔の一条院におりゐさせ給へきさためになりぬ年ころもつきのおはしますましきにやとくちおしきことにあけくれおほしめしつれとさりととも

「（九六丁オ）

あるやうあらむなとたのみすくさせ給へるを昨日けふとなりてはなをいとほいなき事におほしめす事かきりなし世の人もまたさかりの御よはひなりちゝみかとたにたゝ人になしきこえさせ給てし宮を又とりかへし坊にすへ給て位をさらさせ給事はあるましきことなやめと大殿などはさはかりやむことなくおはせし后はらになのめにしたにあらぬさまにてむまれ給へりし物をたゝ人になし給あるまじかりしことそかしなどの給をいとおこかましと大將殿はきゝ給さかの院にもおほしはなれにしかたさまの事なれと

「（九六丁ウ）

なのめにもいかてかはおほされん命のなかゝりけるか

うれしき事とよろこはせ給に斎宮もあやしうさとしかちにてなやましけにし給よしきこゆれはさかの院などもおほしなけくにあまてる神の御けはひいちしるくあらはれて給てさたゝゝとのたまはする事ともありけり大將はかほかたち身のさえよりはしめこの世にはすきてたゝ人にてあるかたしけなきすくせありさまなめるをおほやけのしり給はてあれは世はあしきなりわか宮はそのつきゝゝにて行すゑをこそしり給はめおやをたゝ人にて

「（九七丁オ）

みかたとにゐ給はむ事はあるましき事なりさらてはおほやけの御ためにいとあしかりなんやかていちとにくらゐをゆつり給ては御いのちもなかく成給なむこのよしを夢の中にもたひゝゝしらせてまつれば猶心え給はぬにやなどやうにさたゝゝとの給はする事おほかりけれとあまりうたてあれはもらしつかゝるよしをしのひて内にもおほ殿にもそうせさせ給へるにきゝおとろかせ給事かきりなしわか宮の御ことをそたれも心えずあやしうおほしける大殿うへなどの御心の中そいひつくすへきかたなきやあらたなる神

「（九七丁ウ）

の御心よせとはさたかにきゝなからもあまりにさるましきほととの事は行すゑもいかゝとおそろしきかたもさまゝゝ

心しつかならずおほさるれとかうき、給てのちは思ひ
ねにやあらむ御かとの御夢にもとの、御夢にもとく
かはりぬさせ給はすはあしかりなむとのみうちし
きり御らむすれはいと心あはた、しくおほされて
まつ我御みこになさせ給て八月にぞ御国ゆつり

あるへきさためになりぬちかき世にかゝるためしも
ことになき事なりとやおほやけをそしりたてまつる
へきやうもなければとなをいかなる事かあらんといひ

「（九八丁オ）

なやむ人おほかるにたうりをたとりしらぬ女などはたかき
もみしかきもた、時／＼も見たてまつらんことのたえぬる
事と思ひななくさま世になく成給へらむ人のやうに
あまりゆ、しきまでそありけるみつからの御こゝろにも
おほしたちしかたさまいとかけはなればて、いまさらに
いとあはた、しくありつかぬ心ちそし給へければふさはし
からぬ身のすくせとおほしなける、なかにも斎院を見
たてまつり給はむ事のいまはありかたう成ぬへき
くちおしさいまさらにいひやるへきかなければこの
世にいひあつかふらんやうにけにはえあるましき事

「（九八丁ウ）

なれはいとかうしもおほゆるにやあらん又えたもつまし
かりけるにやとさすかなるをこかましさをあらはしはてん
ことよなとかた／＼にさへやすからすわりなき御こゝろの

うちきしかたにもいやまさりになりたりされと
みかとの御心ちまことしうおもはせ給て一条院に
わたらせ給ぬれはのかれ給へきやうもなう成ぬるに
おほしわひていまは御ありきもあるましけれと斎
院に夕さりつかたしのひてまいり給へりつねよりも
あつさ所せきとしにて御まへにもなやましく
おほしめさるゝにからうして夕風す、しく吹いて

「（九九丁オ）

たれは人／＼はしにいてみつ、月の心もとなきを待
わたるほとのとと／＼しさにまきはさせ給てすこし
ぬさりいてさせ給へるなりけり思ひかけすをとなうて
まいり給へればふともえ入はてさせ給はぬ御けはひの
つねよりはちかき心ちするにもいと、心のうちは
かきみたりてしのひかたしかやうにまいり侍らん事も
いまよりはあるましきさまにうけ給はればこよひはかり
もなを見たてまつりてこそはとてなんいとあまり
おもひかけぬありさまに侍ればすくせなともつきて
世にえなか、らぬやうも侍なむまたさらすとも見

「（九九丁ウ）

たてまつらむことこよひはかりこそはかきりにも侍らめ
とえもいひやり給はすいとあまりなる御けしき
をまかくのみかきりなき御なからひとと見たてまつり
しりたるにまいてこの御ありさまはおほつかなうて

一日もけにすくしかたうおもひきこえさせ給はむ事
 ことはりそかしなと哀にそみたてまつる御まへにも
 見るをあふにてやむへき物とおほしめしつるを思ふ
 さまにうれしき御ありさまなからおほつかなさけにと
 はかりはみと、まらせ給へといひのことつ、けてある
 へかしき御いらへもなければ我御こゝろの中は

「（一〇〇丁オ）

はるへきやうもなしあきらかならぬ空のけしきも
 猶心つくしに見まいらせ給へるをかつらおともおなし
 こゝろに哀とやみたてまつるらむあつけにたちくもり
 たりつるむら雲はれて月のかけはなやかにさし出
 たるに御木丁にはつれてけさやかに見えさせ給へる御くし
 のかゝりつらつきなど等覺の位にさたまるとも見たて
 まつらすなりなむことはくちおしかるへきをましてと
 よりこの世のえいようはことにこのます成にし御心なれば
 いかてかなのめにはおほされんあさましき御心のうちの
 かけ／＼しきかたさまをはいまはいかなりともおほし

「（一〇〇丁ウ）

よるへきならねとみつのしらなみなる御ありさまを
 雲のよそにのみおもひやりきこえさせ給はんにはなからへ
 ぬへからんいのちの程なりともいか、とおほしつ、けて
 月のかほのみななめさせ給ひけり

めくりあはむかきりたになき別かなぞらゆく月の

はてをしらねはとてをしあて給へる袖のけしきもか
 きりあるよの命ならぬはけにとやおほしめさるらん
 あまりにまはゆければ御木丁をひきよせさせ給て
 やをいらせ給まきはしに

月たにもよそのむら雲へたてすはなく袖に

「（一〇一丁オ）

やとしてもみんなをさりにいひすてさせ給なくさめ
 はかりもけに中／＼なるを思ひはなれぬほたしとも
 成ぬへしさふらふ人／＼などをも御らむすることの
 たえはてなむを哀におほすとみにもいてたまはず
 はかなしこともなつかしうきかまほしき御けはひにて
 あはれに心ほそけなる事などをたまはすれはみたて
 まつる人もかう世にめつらしき御よろこひともおほえす
 袖もぬれわたりつ、月も入かたになりけりいまはかう
 かる／＼しき御ありきもいとあるましき事なれば
 さのみあるかせ給はむもひんなくていてさせ給御心猶

「（一〇一丁ウ）

せりつみし世の人にもとはまほしくそおほされたる
 また夜はふか、らむとおほしつれとあけにけるなる
 へし道のほとに恋草つむへきれうにやと見ゆるち
 から車とも、あまたやりつ、けつ、行ちかふ御車なども
 いたうやつし給て人すくな、れはにやは、かるけしきも
 なくちかき程にのりなからすくもおそろしきまてに

おほさるれと思ふかたさまへと御らむすれは御めとまり
給てなを見をくらるゝになにのすかたともみえす
ものくるおしけなるさまともをさしも思ひしらぬにや
やすらかにのりなしてこのころわらはへのくちのはに

「（二〇二丁オ）

かけたるあやしのいまやうたともいとしらくしき
こゑにてうたひてするけしき心をやりてないかしろに
思ふことなけなるにつけても

な、車つむともつきしおもふにもいふにもあまる

我恋草はとそおほしけるかくて八月廿日御国ゆつり
ありけるかねてよりめつらしかるへき事に天の下いひふる
しつれといまはとかはりゐさせ給程のありさまなど
は猶うつ、とそおほえさりけるなにも事もひとつに
思ひきこえさする人はなかりつれとことかきりあれば
おなしさまにうちつれ出入もし給つる人／＼はあさましく

「（二〇二丁ウ）

のみおほさるゝに見なしにや御かたちありさまかくては
又やうかはりてめつらしきひかりさしそへ給てたゝ人
にすくさせ給けんことかたしけなくそ見え給ける
大殿も閑白をは左大臣にゆつりきこえさせ給ておりゐ
の御かとの位にさたまり給てほり川の院ときこえさす
は、宮をは皇太后宮とそきこえさせけるかうおほしかけ
さりし御ありさまとも、さるへきこと、はいひなから

一条院の御心さしをろかならずおほししるれは一品
宮を猶をろかに思ひきこえさせ給ましくほり川の
院にはきこえさせ給つゝとくまいらせ給へきこえ

「（二〇三丁オ）

させ給へと心より外に時／＼見えたてまつりしたに
やすからさりしをいまはなにしにか雲のうへまで人
わらはれにおこましきありさまをあらはしはてんうき世
の中もかゝるつゐてにこそは思ひはなれめとのたまは
せてまいらせ給はむ事はおほしもかけたまはねは一
条院きかせ給ていとあるましくなを／＼しき御心
なりとむつかりきこえさせ給てたゝいたしにいたしたて
たてまつらせ給へはいとむつかしくおほしなけかれて
そのよにも成ぬるにつらき所おほくはなさしとやおほし
けん姫君のかきりをめのとたちなとそへたてまつらせ

「（二〇三丁ウ）

給てまいらせ奉り給ぬさふらふ女房などとはか／＼しく
しらねはまいてとの人ともはとまらせ給ぬるもえしらせり
けり御かとはれいの御けしきのわつらはしけなるを
いかにとはおほしなからさまかはりたるありさまをいか、
見たまはむとはつかしきかたにも心ゆるひなう思ひ
きこえさせ給つゝ、心ことにひきつくるひてまつき

こえさせ給へるに御こゝちれいならてとまらせ給に
ける御かはりにひめ君なむ一とこまらせ給けると

そうするをきかせ給にいとあやしうほいなき心ちせ
させ給へといてやいとおもはずにかとくしき御心

「（一〇四丁オ）

はへは見まうくのみおほえさせ給けりをくりをかれ
給へらん御ありさま哀にゆかしうおほしやるるは
やかてわたらせ給へりひいなをしすへたるやうにてちいさく
うつしけにてみ給へるを御らむしつけたるまつかき
くらさるゝ心ちせさせ給いか、はせんかくまておほしゆつ
りければいと、をろかならずこそは思ひきこえさせめ
すむ人すくなくて内わたりもいとつれくなるへきを
心やりところにも人の思ふばかりにもてなしてさふらへ
なと御めのとたちにもたまはせていと心くるしけに
そおもひきこえさせ給へるかくみやのとまらせ給にける

「（一〇四丁ウ）

ことを一条院にもき、給てければいと物しうおもはず
なる御心と返くきこえさせ給けれといかにもく
おほしそめつる事をはなをらぬ御くせなれば御心ちいと
なやましうおほされてなとそきこえさせ給ける
内よりも日をへてうらみきこえさせ給へとかやうにもて
なさせ給ておさく御返事もなかりけりこうき殿には
日々にわたらせ給つゝことなをしへたてまつらせ給に
いとさとくうつくしうひきとらせ給つゝ、なに事もすく
れて見ところあるさまにおひいて給ぬへきをあはれに

うつくしうおほしめさるゝにつけてもあらましかは心やす
「（一〇五丁オ）

きわたくし物にてましらはまし物をなとわすれかたう
思いてさせ給こといやまさりなりかうのみこの御まいりの
すかしくからすわつらはしかりつるには、らせ給てかの
なくさのはまもいまゝ、御らむせぬはいと、御心もま
きるゝかたなう物なけかしきをいまざりとともあるへき
事ならねは宰相中将にもまいらせ奉り給へきさまに
のみのたまはすれといならすなやましけにし給へは
いかにと見たてまつり給てさやうにそうし給をきかせ
給てもいと、しつ心なうおほつかなうおほしめさるゝ
まゝ、にとみによるのおとゝ、にもいらせ給はすはかなき

「（一〇五丁ウ）

ことふえさるへきふみとなど御らむしつゝ、こよなう
ふかして御とのこもるやうなれと心もとまらさりし
みちのほとりともさへおほしいてられてあかしがたし
月いとあかき夜はしつかにおはしますにきまなう
さし出たるを御らんするにもかの夜なくにとの給ひし
御けはひまつおもひいてられさせ給ていみしう恋しく
おほえさせ給ふにさやかなる月影もやかてかきく
もる心ちせさせ給ていと、心も空になりぬ

恋てなく涙にくもる月影はやとる袖もや

ぬるゝかほなるむら雲はれ侍めるをいかやうにてか

「（二〇六丁オ）

た、いまも御らむすらんとゆかしうなとやうにて
ちかうさふらふ殿上のわらはを斎院にたてまつらせ
給へればけに雲のうへはまいていかにとおほし
めしやらせ給つる様の月影なれはおかしき御せう
そくなれとまち見給はん御けしきはつかしき
おほしやらせ給へといまは人つてにきこえさせ給
はむもあるましきことなれは

あはれそふ秋の月影そてならておほかたにのみ
なかめやはするとはかりほのかなる御つかひにきく
ふたへをりもの、のうちき給はせたるをかつきながら

「（二〇六丁ウ）

まいりたるかしらつきなと月にはへてうつくしき
にめつらしき御うつりかさへなへてならぬにほひに
うちかほりたるそいと、恋しくおほえさせ給て
人めもしらす引きよせて涙もおとしかけつへくおほしめ
さる御文のけしきなとまた、おほかたにおもはせたる
なつかしさをはろかなからぬさまにいひなさせ給へる
さまなともさしむかひきこえさせたる心ちのみせさせ
給ていと、御とのこもるへうもなければゑむし
ろうのうちとひとりこたせ給つ、うしみつと申まで
に成にけり心やすかりし御ありさまにてたに身を

「（二〇七丁オ）

心ともせぬ世のなけかしさをおほしあつかひしに

いまはいと、さま／＼につけてたちまふへき心
ちそせさせ給はさりけるかやうなる御けしきを

一品の宮御かたに心よせまいらするうへ人などは

つき／＼しう見なしたてまつりつ、あはれけにかたり

きこえさせずれともとより物おもはしけなりし

人くせにいと、宮の女御のまいらねはにこそとおこか

ましくそきかせ給ける御つかひもたえすまいりつ、

かくあさましくほいなきことをきこえさせたまへと

御物うらみのかきりにもあらずききにし御ありさま

「（二〇七丁ウ）

とものやうにいつとなくなやましうおほさる、おり／＼

あれはこそえなくもあらし物をと心ほそくて御返など

はかりは中／＼なつかしけにきこえさせたまへと

まいり給はむ事はいと、おほしたえてさまかへさせ

給はむ事をそほしいそきける宮の女御の御心ちは

た、ならぬさまに人／＼見たてまつりしりて大宮に

もけいしてければこのしのふ草の御ことはかりをこそ

さはかりもきかせ給へわか宮の御事などはたしらせ

給はぬにかうめにちかくあさやかなる御ことをめつらしく

うれしくいかてかはおほしめされざらんこの御ことの

「（二〇八丁オ）

のちよりこそあさましくおほしうかれたりし御

けしきもすこしなをりかくありかたき御くらゐにも
さたまり給へるにいとゝをろかならさりける御すくせ
の程さへ見つへき事と院などのおほしよろこひ
たるさまそいまよりいとこちたかりけるうちにも

かうとそうせさせ給ければいとゆかしき事をさへ
そへておほつかなさわりなくおほしめせとの月は
いむへしなとあれは忍すきさせ給て十月にこそ神
わさなとしけゝれとあなちなるひまにまいり給へる
御つほねは藤つほなりすみそめにやつれ給へりし

「（二〇八丁ウ）

御ありさまにたにみたらし川のかけにもならひきこえ
させ給ぬへくありかたかりしを紅葉のにしきにたち
かへてまいり給へはいま一しほのひところもまさり
給へるにおほつかななくてすくさせ給つらん日かすもうら
めしくそおほえさせ給けるかゝる程はすこし御心も
なくさむやうなるに又いかにそやたゝそれかとまで
おほえたてまつり給へる御かたちけはひもふと

おもひ出られさせ給かたつかたはまつ御むねふたかり
てこの世のうちなから見たてまつらすなるへしとは
思ひかけさりしわさかなとおほしつゝくる程いかばかり

「（二〇九丁オ）

見れともあかぬ御ありさまをさしをきてつくゝと
なかめいらせ給て

かくこひんものとしりてやかねてよりあふ事たゆと
見てなけきけむとおほさるゝにつけてもくらへ
くるしき心のうちは猶いとわりなしさるはさまこ
とになやみ給へるけしきのらうたけさなと

にもたちならふ人ゝのあらましかはいかに心より外に
くるしくむつかしからましことをそいたくうるさう
なりにけるもきしかたさへうれしきまでたちはな
れすおきふしかたらひきこえさせ給へりとし比いか

「（二〇九丁ウ）

さまにしてたまさかにかよはしみたてまつるわさもかなと
おもひねかひ給へる上達部みこたちなとかくおほや
けさまにならせ給てはいなひさせ給はぬやうもあり
なむわつらはしかりつる一品の宮さへかく世をそむき
給ぬへかなるはあこの御すくせのめてたかるへきなりと
をのゝ御むすめともをいとゝもてかしつきて大貳の
三位なとして御けしき給はる人ゝおほかりける
そのなかにも人しれぬさまにてたえ給にしも又さまで
はあらねとさやかなりし月影もしはともしひの
ひかりなとやうにてもすこし心にききあたりともは

「（二一〇丁オ）

おほつかなきもなくゆかしき事なかりし御心の
うちなれはかくていつしかとかるゝしくそれをなと
とりわかせ給へきならねはたゝかくてもなかくしも

えあるましきありさまなれはなに事もいとつ、
ましきをいましはしもなからへはさやうにてなとい
らへさせ給ものから人しれぬ心のうちともはいと
うらめしく思ひいて給わたりもあらむかしといかく物
なけかしき身ならさまししかはなとかはかゝるおほかた
なるありさまにては見さらましとさすかに心くるし
くおほしやらるゝところ／＼もあれといてやこの世も

「（一一〇丁ウ）

あの世も思ひしことはたかひはてぬるかはりには
かうなからもさやうにみたりかはしく心をわくるかた
たになくていま二三年たにすくしてはいみしからん
ほたしともをふりすてゝ世をそむきなんとおほし
けるしも月には五せちなといふことともにより女御
まかて給ぬへきをくちおしうおほしわひつゝ、なとかく
やすからぬ身となりけんとのみおなし事をのたま
はせつゝ、ゆるしかたけなる御けしきなれとけにか
きりある御ことなればさのみもおしみはてさせ
給はてまかて給ぬる名残もいとわりなきぞあまり

「（一一二丁オ）

まさるゝ、方かたなきわ（は）さにこそとおほししられける
はかなくとしもかへりてかものまつりの程にも成ぬ
れは御けいのこせむともつかひなとさためさせ給
にもすきにしかたの事とおほしいてられて斎院の

わたりつねよりも恋しくおほしやらせ給におほかたの
殿上人などの心／＼にしつゝ、あまたまいらせしあふきとも
はさる物にてみつからの御れうなどは我御心と、め
させ給つゝ、たてまつらせ給しをのみもたせ給へしかはおや
やけしきゑところなにてのあら／＼しきにはあらて
さるへきくら人ともうけ給て日ことにかはるへき女房

「（一一二丁ウ）

のれうともなとさま／＼にせさせ給さま心に
めてたしなともよのつねならぬさまにしたてさせ給て
なをおしみ人たのめなるあふきかなてかくはかりの
契ならぬにと御れうなるはへちなりつゝ、みかみに
かきつけさせ給ても院なともこそ御らんしつくれと
おほしかへせとしとろもとろにやおほしなりぬらん
ひきもかへさせ給はすなりぬ御つかひは五位くら人
にやあらむおほしやらせ給しもしるく院のおはします
ころなれば御つかひかひ／＼しくもてはやさせ給
あふきともめもをよはぬをあまりおほやけしからぬ

「（一一二丁オ）

物ともかなとめてさせ給にまたへちにて心ことなるは御
まへのとみゆるにかきつけられたることゝも御らむし
つけたれといとかはかりおほくの年月をへておほし
こかれたまふ御心としらせ給はねはたゝおほかたの
ことをたまはせたとのみ御らんして御てをのみ

めつらしからん人のやうに袖のいとまなくをしのかひつゝ、めてゐさせ給へり斎院はなまくるしくおほしめさるれと御返とく／＼とのみきこえさせ給へはおほしもあへすた、

あふきてふなをたにいまはおしみつゝ、かはらは風の

「（一二二丁ウ）

つゝ、くやあらましとあるを御らむしてもれいの心をみそつくさせ給まつりの日は近衛つかさの使のした、まいるをうらやましく見をくらせ給て

ひきつれてけふはかさししあふひさへ思ひもかけぬ

しめのほか哉とおほしつゝ、けてなかめさせ給へる御

まみなとのなを国王ときこえさするにもあまりて

けたかくなまめかしく見えさせ給へりかくて藤つほの

女御みけしきありて院のうちところなきまでほう

しもそくも世にあるかきりはたちこみてゆすりみちたる

に内の御つかひあめのあしよりはしけゝれと行かへる

「（一二三丁オ）

ほとも心もとなくいかに／＼とおほしめしやらせ給に

いとたいらかにておとこみこにてなときかせ給御心ちをろ

かならんやはまいてめにちかく御らむしあつかひきこえ

させ給ふほり河の院の御けしきことはりもすきてか

きりなき女御の御さいはひと見えたり一品の宮のひめ

君の御ことをたに世の人はしらねはたゝこれをはしめ

たる事と思ふにいみしくともわか宮の御おほえはいまはいかにそはうにゐ給はむ事もさはいふともまことの当代の今上一の宮をはおとしきこえ給はしなとまたしきにきゝ、にくゝさためきこえさするをさかの院にはけに

「（一二三丁ウ）

いかゝときかせ給そおこまましきやこの宮の御うつくしきのなめならむにてたにうち／＼のことしらせ給はぬ御心ともにはけに行末も思ひおとし聞えさせ給ひかたけなる御けしきもことはりなりたゝ大宮院などの御ひさのうへにとりかへ／＼あつかひきこえさせ給へるさま

けによの人の物いひもかなひぬへきにやと見えたる

大貳の三位なとうちにまいりつゝ、かゝる御けしきになとそう

するをきかせ給にも若宮の御おりよそのことにうちきゝきて

すくしゝにまれ／＼中納言のすけのほめかしいてたりし

よりあさましくかなしくうつし心もなく成そめてかの

「（一二四丁オ）

「（一二四丁オ）

たつの一こゑきゝつれたりし雪のよの事もまつおほし

いてらるゝにかはかりも我物と見たてまつるはあるへかりし

事かは我年ころひとへに哀にかたしけなく心くるしき

かたにも又あかすくちおしき人の御ことの年月ふれとす

こしも思ひなをされぬ心のうちのかはかりにもとりあ

つめていま行末いみしき人いてくともひとしうたに思ふ

へくもあらぬ物をいまよりかくさへ人のいふらんをもしみ

にと、めてかのわたりにも聞給やうもこそ心くるしうおほしつゝくるおりしもあたりもひかるはかりなる御かほつきにてさしいて給へるをひきよせたてまつり給へはゆらく

（二一四丁ウ）

と女のやうなる御くしのきよなるかきなてつゝ、ほり川の院には二の宮をうつくしかりなつき給て宮をひさしく見給はぬこそ心うれなまろよりほかにかきりなく思ひきこゆる人のなきこそあはれなれとの給はするをとしのほとよりこよなくおとなひしつまつり給へるけにやけにとおほすにすこし涙くみてまゆのあたりもうちあかみてうつふし給へるかしらつきかみのかゝりひたいつきなとはかの昔ほのかなりしほかけにもいとよくおほえ給へりかしと御らむするに我も涙こほれさせ給ぬかやうなるありさまにつけてもさりととも見なおし給心のほともあり

「（二一五丁オ）

なまし物を行末はたかゝる人もあれはうき世とのみおほさるへくもなかりける物をいかにしなしてし我心そときのふけふのやうにくやくし哀なる事ぞ猶かきりなき御すゝりのあきたるふてをとらせ給て

かなしさも哀も君につきはてゝこはまたおもふものとしらぬをとかゝせ給て見せたてまつり給へはさすがにうちゑみ給てこれにはかならずをとり侍なんかしとてうちぞは見てかき給手つきなと女宮にそせま

ほしき

ことはりもしらぬ涙やいかならんわれよりほかの

「（二一五丁ウ）

人をおもはゝとかき給へる御てのうつくしさをことほりそかしたれにに給てかはなに事もなめにと御心にもことはられ給にこのしらぬ涙を哀におほしめさるれとさかの院のおはせん程はこの御心にもいひしらせ奉らしとおほすなるへしさしも御心とまらぬわたりにたにおとこみこむまれ給へるに行幸あることはつねのことなるにこれはまいて大宮を見たてまつらせ給はんこともいとかたければさまゝに心もとなからせ給てなぬか過るまゝ、に行幸ありひさしく見たてまつらぬ事をなけく人たかきもくたれるもあまたありてこの程にとたち

「（二一六丁オ）

こみたる物見車ともかち人ともこちたきまておほかりひさしく御らむせさりつるしつのいほりとゝもゝ又たまさかにたちより給しいもかすみかのま木の戸とともゝ哀にすきかたくみいれさせ給にゆゑなからぬけしきしるくさはかりにやとみゆるさしきくるまともものまへはいかにつらき心とみるらむとおほすもくるしくてしりめはかりたゝならてすきさせ給をけにあるへき物をと中ゝにあかすくちおしくおほさるゝ人ゝそおほかりけるまちつけきこえさせ給へる院のうちにもかみしもめ

つらしき御みゆきを見たてまつりよろこふにまいて

「（一一六丁ウ）

大宮はいま／＼しきまで涙もろにおはしますなにかやかと御物かたりしはしはかりにてそわか宮見たてまつりにはわたらせ給けるいひしらすうつくしき御かほつきなと一の宮にたかひきこえさせ給はすおなしさまにてふさせ給へはものとしらすとかやのたまはせしかとけにこれもをろかには思ふましかりけりとそ御らむしける女御はなやましけなる御けしきにてあえかにほそり給へるいと、心くるしくあてにらうたけなることまさり給て見をきかたくおほしめさるれと暮ぬればかへらせ給ぬ院の別當けいしともなとれいの事なれば

「（一一七丁オ）

かゝるしけりかく思ふさまにめてたき御ことをきかせ給にも一品の宮は物をのみおほしなけくけにや御心ちもまことしうくるしからせ給てつゐにあまにならせ給ぬるを一条院にもうちにも返／＼くちおしく哀におほしめすにいくらはかりの日数もへてうせ給ぬれはいとあさましくかなしくおほしめすなにも内には心とけてすき給ぬるを心くるしくかはかりみしかりける御命のほとをなとてさしも見えたてまつりけむなとれいの過にししかたしのふ御くせなればつねよりことなる御なみたもろさなりされと宮の女御后になしきこえさせ給て

「（一一七丁ウ）

わか宮ひきくしてまいらせ給て御らむするにはさのみ心ふかき御心といひなからもやうの物といかてかしつみいらせ給はむ露はかりわくる心なくてこの世にはすきはて、後の世にもおなしはちすにとのみいひちきらせ給つ、あけくれさしむかひてたゝ人のやうにてすすき給御ありさまいにしへにたとしへなきもたゝこの御さいはひのなのめならさりけると世人／＼いひ思ける月日もはかなくすきて宮の御はてなといふことゝもすきて又の年の秋冬はおほはらの春日平野などの行幸ありはしめてめつらしき御みゆきなるにそへてもみかとの

「（一一八丁オ）

御かほかたちありさまこの比さかりにねひとゝのをりはてさせ給てすこしもなのめならん事はあかすくちおしかりぬへき御ときなればにやあなかに物このみする人のみおほくなりて上達部殿上人などの馬くらのかさりもとねりむまそひのなりかたちなとも世にめつらしきさまにもとたれもいとなみ給へればみどころはこよなきをいかなる人か見ぬはあらんほりかはの院にはひわたらせ給し程にたちこみたりし物見車のこちたさなればまいてたひことにあかす見奉らまほしきまゝにれいにもたかひて心あはたゝしきみち大ちのさまなりかもの行幸は九月

「（一一八丁ウ）

つこもりなれば野への草とも、みなかれ／＼になりて
みちしはの露はかりそみしにかはらぬ心ちしけるこゝろは
ゆかすなからもあまたたひ行かへりしそのかみはなに
事をかはおもひけんと恋しくおほしいつるにれいのかき
くらさるゝ御心のうちをもしらす河わたらせ給とはかよ
ちやうのこゑ／＼もき、にくきを身もなけつへき川
の契りをなとかくいふらんときかせたまふ

おもふ事なるともなしにいくかへりうらみわたりぬ
かもの河なみなめけなる心のほときはきしかた行末こよ
なくおほゆるを露はかりおほしとかめすかうあるましき

「（一一九丁オ）

さまにさへしなし給へる神の御心はへをおもへはかたしけ
なくありかたく思ひしられ給をひとかたしも見かたう
成給にけるのみそなをさらにうらめしくおほえさせ給
神のやしちに御はらへつかうまつるにもすきにし年
たて給へりし御願かなひ給てけふまいらせ給たる

さまいまより後代を久しくたもたせ給へきありさま
なとき、よくいひつゝくるはけにあまてる神たちも
みたて給らんかしときこえてたのもしきをさしも
なかうとはおほしめさぬ御心の中にはうれしがるへくそ
きかせ給はさりける

「（一二九丁ウ）

やしまでも神もき、けむあひもみぬ恋ひまされてふ
みそきやはせしそのかみに思ひしことはみなたかひて

こそあんめれとそおほしめしける十月かみの十日はひら
野の行幸なりけりこのたひは紅葉のさかりにては、
そはらおかしうわけ入せ給に山はみなくれなぬなるを
見たされ給にも忍つゝも御らむせぬところ／＼は
すくなかりしかは北山のあたり報恩寺は袖ぬらす宰
相のかよひ給しところなどはおかしかりもおほし出らるゝに
梢の色も心ことに見やらるゝを煙もところ／＼に
たちふもとをこめたるきりのへたてもたと／＼しきは

「（一二〇丁オ）

中／＼いと、恋しき事おほく御らむしわたすに齋院の
わたりの紅葉もいみしうさかりにて色／＼のにしきをひき
ちらしたるやうにみえわたされたるに嶺のあらしあら／＼
しく時／＼聞わたしてちりまかひたるなどゑにかゝま
ほしきをさしも思ふあたりならずとも心はかりはあくかれ
ぬへきをいと、ひとつかたにのみなかめいらせ給へり
神かきの枚の木すゑにあらねとも紅葉のいろも
しるく見えけり御らむするにもかひなしふなおかの
あけくれさしむかひたりしをめつらしきともとおほし
なくさめてたちかへらせ給もあかすわりなくてひき

「（一二〇丁ウ）

よかぬわさもかなた、いまなに事をしていかやうにてか
おはしますらむなと見たてまつらまほしうおほしめさるゝ
にたましゐもはやくあくかれぬらんとまてかへり見させ給

あはとみる身はふなをかにこかれつ、こゝろはゆきぬ
こはゆけるかはなとやうに野山川のそこを御らんするに
つけつ、もおほししみにしかたさまの事はさらにわすれ
させ給はすかつみる人の御ありさまのめてたくおもふさま
に御らむせらるゝにつけても我御すくせのめてたかり
けるはかた／＼につけつ、なのめならすおほししらるゝ
物から御心の中はさらにやすかるへくもなかりけり

「（二二二丁オ）

こき殿にひとりすみ給ひめ君の御事は心くるしう
おほしあつかひつるに宮うせさせ給てのちはほり河の院
も大宮もつねにわたらせ給つ、見たてまつらせ給にいと
はかなうきかせ給し道芝の露のかたみとまきはす

へうもあらすなまめかしうおかしけなる御かたちはわたり
けむは、君の御さまさへおほしやられていとあはれに
かたしけなう御らんせらるれはいまゝてかる／＼しき
御名さしをもあるましき事なるを一の宮の御けん
ふくあるへきにやかて御もきのことおほしいそかせ給
けりなに事もおほやけさまにあらすほり河の院の

「（二二二丁ウ）

御いそきなれは世のためしにもすはかりなる御いそぎ
のありさまなりときはのあま君のむすめのこたち
よりほかには宮の御もてなしのいとあなつらはしけに
おほしめしたりしかはさふらふ人／＼もうち／＼にはなま

いかにそや思ひたりしかといまはかみしもさなからこの御
かたにまいりあつまりていとやむことなくてまことしき
人／＼のあまたさふらふ一条院にもこ宮のあはれにおほ
しあつかひたりしこと御らむししりにしかはかたみに
もたれをかはおほしめしてかゝる御いそぎをもき、
はなたせ給はす心ことなる御さうそくあふきたき物

「（二二二丁オ）

なとやうの物をそ御心さしのしるしことにてたてまつら
せ給けるその夜のありさまかきつゝ、けすともおもひやる
へし二宮の御はかまきもこよひなりければよろつさし
あひてさま／＼のめてたき事のみあまりなれはせう／＼
まねひたらむは中／＼そこなはるゝ事もありなむかし
よろつの事きよらなるなかにもさま／＼おとなひさせ
給へる御ありさまとも猶すくて見ところおほく

「（二二二丁ウ）

見えさせ給けるそのなかにも一宮の御あけまさりの
ゆゑ、しさはなをいづくにいかなりし人そとむねうちさは
きて哀あさからぬ御心さしすくれたりこの道芝の露と
かすならすおほしあなつりしなこりとも見えぬ御あり
さまをこよひやかて一品になしたてまつらせ給つ思ひ
かけすあさましかりし道ゆきすりに心うかりし法の
師のあしもとなとたゝいまの心ちしてめつらかにも哀に
もおほしめしいてらるゝ、事おほかるにこよひの御あり

さまを見給はぬくちおしさをそなをくあかすおほしめさるゝこの世はとかやありし夢さめてもしいかやうなることのありけるそとはしめて心えかたうおもひまとひし暁よりはしめて我物とみるへきやうもなかりしによりいかゝはせむにおもひよりはりて見たて

「（二三丁オ）

まつりし人さへひとりうちにうちまかせて我はうせぬるも思へはさまくにはかなうあはれなる世なりやなとりあつめ涙こほれぬへきをいまくしうおほしかへすへかめれと何事のおりもまつ心のうち物あはれなる事そたゆへくもあらぬ御ありさまともなる一宮をは兵部卿宮とそきこゆへきなめるまたの日そさかの院へまいり給へる御まへにてよろつにつくろひきこえさせ給へる御さまのうつくしささらにねひゆかん行末をしはかられてあまりゆゑしきまで御らんせらるゝをさりともしむけには見はなちきこえ給はしとたけうおほさるゝ物から

「（二三丁ウ）

いかはかりの心にて年月ふれとかはらぬ御心のつらさなるらむとけふは猶すこしうらめしさもたくひなければ雲のかよひちあとたえて後はいとゝやるかたなき心のうちはかりにおほしめす御文なれとこまやかになりぬよへのありさまひとり見侍しも哀なることおほくなとやうにて

年つもるしるしことなるけふよりはあはれをそへてうきはわすれねざりともと見え侍ありさまをけふは御らむしいれざらんもあり人めわかくしうなとかゝせ給てれいのしのひてをときこえさせ給へはひきかくして

「（二四丁オ）

たち給ぬるなこりも涙ほろくとかほれてなかせ給さかの院にもまちうけ奉らせ給ていかゝはなのめに見たてまつらせ給はむかくてはいとゝ内のうへに露はかりたかひきこえさせ給へることなきをあさましくかのあまてる神のほめかし給けむこともあるやうありけることにこそとおほしやるかたさまにもこ宮の御ためそいとおかしかりけるれいのさほうにはいしたてまつり給て入道の宮の御かたにはたゝまいりてさふらひ給そ哀なるや忍てありつる文まいらせ給をかゝる事をほのくきこえいてゝさゝめきあやしかる人くおほく

「（二四丁ウ）

なりにたるにいとゝさまく物をおほしなかくこといみしきにけふの御さまはいとゝこと人とさへおほえ給はぬ面影のはつかしささへわりなくて御らむすへきやうもなきにましてけふしも哀そへさせ給へきにもあらずさきくはひたふるにせめきこえさせ給し御返もいまはかうのみくるしけなる御けしきをみしり給へはなをとえ申給はぬものからけふはかならずとの給は

せつる物をいかにほいなくおほしめさむとかた／＼にくる
 しょうおほいたるをいつものめの中納言のすけなど
 はかりそ見たてまつりしりたれば人しれぬ涙とも、

「（二二五丁オ）

おとしけるいとうらめしうおほされてうちにかへりまいり
 給へはうへは藤つほにそおはしましけるやかてそなたに
 まいりたまへればはしつかたにいてさせ給てさて院はい
 か、の給はせつる宮の御まへには御らんしいれ給つや
 などの給はせてつきせすうらめしと思ひきこえさせ
 給へるさま院のおほしめしたるよりはこよなうまさらせ
 たまへるを物の心しり給へるまゝに我心もをろかならず
 おほししらるへし御いらへきこえさせ給さまも程よりは
 おとなしくいまよりはつかしけなる御さまにいたうしつ
 まり給へるけしきなども今よりはこのわたりにならし

「（二二五丁ウ）

きこえむもわつらはしくおほしめさるればはいのやうに
 うちにまいりたまへともたまはすありつる物はいか、
 なりぬるなど思てそきこえさせ給まいらせ侍ぬと
 はかりにてかひ／＼しき御けしきもなかりけりと見ゆる
 けしきもつねの事なれとおほかたにつけても今は
 いかうしもひたやくもりになさけなくやはもてなし給
 へきと人わろきまでつらうおほしめさるゝにいかて
 いまよりたにかはかりもきこえさせおとろかさしと返／＼

おほしかたむれとた、いまもさしむかひ給へる御あり
 さまのなのめならぬ哀のゆかりにはなにかそれしも恋

「（二二六丁オ）

しういか、おほしいてきこえさせ給はさらんとはかり物も
 の給はてうちなかめさせ給て猶たちかへる心
 かなと御心にもあらずしのひやかにいはれさせ給ぬるを
 中宮はほのきかせ給て猶もてはなれ給へる御なかには
 あらさりけりと心えさせたまひて

たち帰りしたはさはけといにしへの野中の水は
 みくさみにけりいかに契しなとてならひにかききすさひ
 させ給にちかくよらせ給へはすみをくろうひきつけて
 おましのしたにさし入させ給をかかりなるなからひに
 さへ猶はかなき事につけてもへたてかほなる御心は

「（二二六丁ウ）

あまりなるをならはし給なめりなとてひきいてて御
 らむしてありつる忍ことゝもの御みとゝまることやま
 したりたりつらんあまりまきるゝかたなければ心の中も
 見しられ奉るそかしとおほししらる

いまさらにえそ恋さらむくみもみぬ野中の水の
 ゆくゑしらねはとかきつけさせ給て見とかむへき
 御ふてのすさひにはあらさめれと思ふ我心には何事にか
 と心ときめきしてかきて侍そとて見せさて
 まつらせ給ものからかやうに人にもいらせてまつり

我もはかなきくちすさひにあるへかりし人の御うへ

「（二二七丁オ）

かはなとおほすに我あやまちのいとおしさもれいのつみ
さり所なく涙さへおちて人にもとかめられさせ給ぬへき
まきらはしにさかの院のあなちにおほしたりしあ
まりになへてならす思ひかしつき給へりし宮の御
うしろ見にとさへおほしたりしかといま、て世にあるへき
物とおもはさりしかは見しらぬさまにてやみにしこそ
おもへはひか／＼しけれ昔よりしてけふいまにもこのかたさま
につけてはいきながら佛になりぬへかりける物を見たて
まつりそめしよりこそはこの世をすてかたき物とおもひ
なりにしか哀にあちきなき事なりやか、れはこそは

「（二二七丁ウ）

仏も止ま不須説との給ひけれとてそ涙くませ給ぬる
兵部卿宮は月日のするま、にうへの御かたちありさまに
たかひきこえさせ所なくめてたくおはすれば春宮に
まいらせんとおほしつる人／＼の御むすめともかゝる御
かたちありさまをよそにはいか、見たてまつらんとお
ほしなりつ、内にもほのめかし申給なかにもかのよし
の川あまたたひいさめ給ひしいまひめ君の御やすかと
なり給し宰相中将はこの比一の大納言にて春宮大
夫かけてそ物し給ける西国のしゆりやうそとては、
しろにいりもまれ給しかとやかてそのあたりをとりはな

「（二二八丁オ）

ちて又たくひなく哀なる心さしに思ひかしつききこえて
しとけなくそきおとし給し髪もおふし給しかはかたくなし
かりし御心もをのつからめてかくされてあまた年も過に
ければいとおかしける御子とおおほかるなかにおほい君
すくれ給へるを大納言はいかにまれ春宮に奉りてか
ならすきさきにすへてんとおほしの給をは、君は昔の
ほいたかひてみかともえ見たてまつらすうと／＼しく
成にしかはりにこの宮をたにけちかくてこそあらせて
まつらめとからうして御心つよくのたまへはまれ／＼はか／＼
しくおほしよらむ事をたかへきこえしと大納言もおもひ

「（二二八丁ウ）

なりに給へるにや一品宮の御かたよりつたへそうせさせ
給ひけるかの几丁のほころひあらそひしけはひとと、た、
きのふけふの事にのみ思いつるを我も人もかやうの事
いひかはすはかりのすゑ／＼あまたたち出給ふまで成に
けるよとあはれにもおかしくもおほしいてらる、心のかきり
もてかしつかるらんひめ君のありさまなともいかならん大納
言はおほかたのをきてはかりこそあらめうち／＼の事母君
のをしへのまゝにそあらむかしそれを見るしとおもはむには
大納言さてはありなんやなに事もあら／＼しく心をやり
てうちはやりたる人からなればそかしとおほしやらるゝたに

「（二二九丁オ）

いとうしろめたくわりなきに琵琶のねひきつたへてや
あらむと思ひやらせ給はひとりゑみせられさせ給てかひく
しくそいらへさせ給はさりけるいとわかき程はあまりきた
まりぬん事はくるしうおほえしをいま二とせ三年すきなほ
みつからぬえかくてもあるまじければさやうの程にたれもく
まいらせたまへとそのたまはせけるきりつほを母宮の
御しつらひのやうにめてたくきよらにさせ給て女房
などのかたちすくれたるかきりあまたさふらはせ給てそ
おはしまさせ給けるほり川の院にもうへのはやうおはしま
し、かたにおなしさまにていてさせ給おりくはもてかし

「（一二九丁ウ）

つき、こえさせ給へるさまなのめならず中宮もかの御心
さしありてつくらせ給し三条殿にいまはいてさせ給へは
この院には一品宮のおはしましところをそ返くみかき
たて、あした夕のいとなみにはこの二所の御事をおほしめし
たりさるはわたくしの御心ともに二の宮の御思ひには
ならひ給へきやうもなけれと兵部卿宮の御ことを
内のなをすくれて思ひきこえさせ給へはうはへはかりは
おとさせ給ことはなし一品宮もいまはおとなひさせ給に
たるを春宮はむかしよりの御心さしかはらすいまは御つかひ
しけくまいりつ、うらみきこえさせ給へれと二宮の御

「（一三〇丁オ）

ありさまなどをおほしあはするにもいてや猶宮たちは

た、心にく、てやみ給はんのみこそめやすかるへけれ
わか御心の程よりは我なからくらくへくるしく心くるしかりし
心中そかしまいてかうなからさりける御命の程にては
かうやうに思ひいてたてまつる人なくては給なまじいかに
めてたからましとおほしめせはすかくとおほしたつへきさま
にもあらさりけりさるは御は、方などにつけてもたの
もしく思ひうしろ見たてまつり給へき人もなくては行末
くるしかりぬへきさまなりとあすのふちせをしらぬ程
はなにかいとたちまちにとしめいそかせ給はん御めのとたち

「（一三〇丁ウ）

さふらふ人くよりはしめ心はせすくれうしろやすかりぬへき
さまとなるを御あたりちかくも候はせ給なとしておほかた
いとけたかくもてかしつききこえさせ給へるさまなへて
ならすいとしもなかりし宮の御おもひなりしかと人のむすめ
の御事をさへかくもてなしきこえさせ給こと、一条院を
はしめたてまつりて世の人もありかたき事にきこえさ
せしかとこの御もきの程よりそかくにこそありけれなど
ことはりに思ひけるかのゆくゑもしらすはてもなくおほし
まとはせし三河守もその、ち人知しれぬ御心のうちはかり
にはこよなくおほしへたてしかとは、北の方おほえすくれ

「（一三二丁オ）

たるゆかりにはなにしにかは思事のすこしもたかはん年
はいとわかくて大貳にも成にければやんことなきめとも

あまたひきくして思ふさまにてくたれとむかしの事とも
思出て物あはれなるにからとまりにてはたこといみ
もしあへすうちなかれて

帰こしかひこそなければとまりいつらむかしの

人のゆくゑはもの、おりことにありかたかりしさまかた
なとをうちとけかたらふ事たになくてやみにしくち
おしさ又人をいたつらになしてしつみふかさなともわすれ
ぬにこの御もきにのほりあひてかく見ならへての世にも

（一二三丁ウ）

さにこそありけれといひさたむるにあさましかりける山ちも
思ひあはせられていましも心のうちにかしこまりなけき
つ、かけてたに思出てしのふこともせしかたしけなしと思ひ
成にけりときはのあま君はうせにしそかし心ちかきりに
おほえけるおりいとちいさくおかしけなるこからひつを
とりいて、これあなかしこをろかにし給はてしのひて宮に
御らむせさせ給へ御うふきぬやむかしの人のかきすさひ
給へるゑともなどのやりすてんかおしかりしとをも
とりをきたりしなりむけにその人の御ありさまとて
きかせ給事なからんよりはもの、心しらせ給なむに御らん
せさせんと思ひしそとてむすめにあつたりけるを
うせて四十九日などはて、まいりたるにつれ／＼なるひる
つかた御まへに人かちにもなければあまきみのゆかし

（一二三丁オ）

かり〇つ、なくなりにしありさまなときこえさするつゐ
てにしか／＼のものこそさふらへと申いてたるをゑをなんい

みしく

かき給しなむとさき／＼もきかせ給てあれをたに

御かたみにみはやなとおほしねかひつれはいみしうゆかしと
おほしたるもことはりなれば御几帳ちかくひきよせ
なとしてとりいてたり御うふきぬのありけるをまつとり御
らむするに我きたりけん物ともおほされす物けなく哀

（一二三丁ウ）

けなるにつけてもかはかりの程をひきはなちてもてさ
すらはせ給けんほとのかなしさうらめしさもいひしらす
かなしくおほさるゝに

人しれぬいりえのさばにしろ人もなく／＼きする

つるの毛衣とさへかきつけられたるを見つけ給へる
御心ちいかはかりかはおほされつらんいと心くるしきけし
きを中将はなにに御らむせさせつらんいますこし
おとなひさせ給てもの、哀ものとむはかりにてこそとり
いつへかりけれとさへおもへとも家もしのはれすかなし
き事おほく見ところあるゑとも、ゆかしければかたはし
つ、ひろくる程にをとなくてうへのふとわたらせ給へは
なにとなくとりいれて中将はのきぬるにちかう物させ
給ていとつれ／＼なりつれば御こともひかせたてまつらん

（一二三丁オ）

とてまいりきつるなりおなしくはき、所あるはかりをしへ
なしたてまつらんなとの給はすれとれいならぬ御けしき
にてまきらはさせ給へはおとろかせ給てぬいならぬおほさ
る、かなときこえさせ給へと御いらへもなくてた、

うつふさせ給へるにこほれか、りたる御くしのか、りかほやう
などい、らうたけさまさらせ給へるもた、むかしの人と
おほえさせ給へりあまりあやしからせ給もかたはらいたけ

「（二三三丁ウ）

中将そかのときはにさふらひしおい人の昔みえ侍けるあや
しのほくともをとりをきてさふらひけるをうせ侍にし
のち御らんせさせよといひをき侍しを思ふ給へいて、
つれ／＼のなくさめにとりいて、侍つるあはれける事
ともさふらひ侍けるにやとそうすれはけにさもおほし
ぬへき事にこそはむかしの人のかはりにはさ、のわき葉^に〇も
たのむへきさまにいひ契しかひなくかきりの程をしも
しらさりけるこそほいなき事なれのちにこそみちすゑ
もいひいてたりしか日つゝあてなとえりけるとかいま一と
せうそこをたにせてくちおしきことなりやそこのさ

「（二三四丁オ）

ふらはぬもつねのさとかちにめなれてとかめさりけるよ
この御ありさまいみしくゆかしけにものせし物をなと
の給はせてありつるこからひつをひきよせさせ給てこれ
や昔のあとならんみなはかなしとかやひかる源氏の、給

ける物をとほのたまはすれと御らむするにみつから
かきあつめ給へるゑともなりけり世になへての人の
事ともみえずありかたかりけるふてのたちとはいつ
れもみ所ありてめてたきなかにも我世にありける事
とも月日たしかにしろしつ、日記してさるへき所／＼は

ゑにかき給へり我時／＼も御らむしそめし程よりの事とも

「（二三四丁ウ）

はいますこしめのみとまらせ給て哀にかなしくおほしめ
さる、事かきりなしみつからのありさま我御かたちなとも
たかふことなくてうちしのひつ、たちより給しよな／＼の
月のひかり風のをとほひよひあかつきの空のけしきなども
わか心におかしくも哀にもめとまり心をしめ給けるおり／＼
をかきあらはし給へるよろつよりもかの御心にもあらず
つくしへくたり給ける程のありさまはめのみきりふた
かりてはか／＼しくたにえ御らむしやらすうたとも、扇に
か、れたりしなとおなし事なれはと、めつときはに
帰て心ちすこしおちあるま、におもひつゝ、くることおほく

「（二三五丁オ）

くちおしかりける身のすくせいとかなし我とおとろ
かしたてまつるへきやうもなく人はそののみくつとのみ
こそき、なし給けいまは世にある物ともおほされしわ
すれ給ぬらんかしなと思給けるほとにや

わすれすは、山しけ山わけもこて水のしたにや

おもひいるらんこの宮むまれ給てのちいと、物をおもはし
さまざりていといみしく心ちもいへうもおほえさり
ければ一品宮にわたしたてまつりてんと思ひなり給ひ
けるありさまかなしともよのつねなり御むかへにちある
人なと給はせたれば心ちのくるしさをねんしてうちゑみ

「（一三五丁ウ）

つ、物かたりもたかやかにし給をかほに涙もあへすほろ／＼と
こほれか、れは袖をかほにふたきてえたに見たてまつら
ぬにあま君御心ちいと、くるしきにいとかくなおほしりそ
たいらかにたに物し給は、忍つ、はつねに見たてまつり
給てん行末なくこそおほされめあなゆ、しとていた
きとりたてまつるをなをしはしはなともえの給はす

ゆくすゑをたのむともなき命にてまたいはねなる

松にわかる、とあるを見給へらん宮の御心ちけにいか
はかりかはおほされつらんとおほしめすに又あまになり
給にけるにもいひ契給ひしこと、もまつ思ひいてられ

「（一三六丁オ）

給ていみしうなき給へる所に

をくれしとちきらさりせはいまはとてそむくもなにか
かなしからましとあるを御らむしはつるま、にさくりもよ、
とかやみたれかはしき涙のけしきを中将かちかくてきく
らむ事もあまり心よはきやうなりとおほしつ、めと
なくより外のことなし

かすめよな思ひきえなんけふりにもたちをくれては
くゆらさらまし

おちたきる涙のみおははやけれどすきにしかたに
かへりやはするなとかきつ、けさせ給ても返／＼かひなく

「（一三六丁ウ）

おほしめさる、事かきりなければ宮には御らんせむたひ
ことに中／＼なみたのもよほしとも成ぬへく又かの人の
ほたしにもいと、か、りぬへき物にて待めるをこのひとまき
はかりはす、しきみちのしるへにもなし侍らんいまは
とてもかくてもかひなきことをすきぬるかたのこととおほし
なもののせさせ給ひそなときこえなくさめさせ給てこの
ゑひとつをとらせ給てわたらせ給ぬるを宮は心のとかに
見すなりぬること、あかすくちおしうおほえさせ給て
ひくらしなきくらさせ給さま心くるしけなりうへは
一ところおきふし御らんするに海山浪風のけしきより

「（一三七丁オ）

はしめて女のしわざとは見えすかきすましたるふての
なかれひきこめてやみなむはくちおしうおかしさも哀さも
見しらむ人に見せまほしきをさい院はかりにはいみしく
御らんせさせまほしけれとみつからならさむかきりは
さすかにめはなちかたき物を心のとかにをきたらんも
あすもありとおもふへくもあらぬ世に見るほとん心
さしにはこれをたにもとふらはんあるにまかせてありぬへ

かりける身のほとをた、我ゆへこそはこの世をもいとひすて
あの世のさまたけともなるらんとおほしめせは我御もとの
のこしをかせ給もいとおしくおほしめされて」（一三七丁ウ）

すきにけるかたをみるたにかなしきにゑにかきとめて
わかれぬるかななどおほしめせとありし扇はかりをの
こさせ給てこま／＼となして経のかみにくはへてすかせ給
てこんていのねはん経御てつかからか、せ給けりかのときはをも
やかて寺になさせ給てこの御れうのくとはそこに
そ月日にそへてつくりかさねさせ給けるさかの院の御
こ、ちなやましくおほしめされて程へにけれとかく
こそなとも給はせずちかはへ御ときも御さははかりを
とらせ給つ、かのいもゐはかりにて阿弥陀仏にむかひき
こえさせ給てた、とくむかへさせ給へとねんしいらせ

「（一三八丁オ）

給へるに此十よ日となりてはおさ／＼えおきぬさせ給はす
ならせ給にたるにそたれもみたてまつりさはきける
一条院の後兵部卿宮などもこの比はひとつ所にあつまらせ
給ておほしなけくさまともいと心くるしけなり御かとも
もとよりあるへき程の御心さしはかりはあらぬ御中なれば
おほつかなかりきこえさせ給を院よりもいま一たひのたい
めんはかならずあるへきさまにきこえさせ給へれば八月
一日ころ行幸あり院いみしくおほしよろこひてあなかに
おきぬさせ給て御たいめんありみたてまつらせ給しころ

よりもいみしき御さかりにてあるへきかきりねひと、の
「（一三八丁ウ）

はせ給へる御さままことに見たてまつらはいのちのひぬ
へきをまつうちなかせ給て月ころも物いと心ほそくて
けふやとのみ思ふ給へつるをかるみゆきをまち侍りて
なむけふまでもなどのたまはする御さまもけにいとたの
もしけなうよはらせ給にけるといかなしく見たてま
つらせ給いとかはかりにならせ給ふまで御いのりなともさらに
せさせ給はすをとなくてすぐさせ給つらんこそいとあしき
ことに侍れすこしもれいならすおはしまさむおりなどは
明くれつかうまつるへき物とおもふたまへしほいなくいまて
見たてまつらさりけること、てうちなかせ給をいとかたし

「（一三九丁オ）

けなく哀におほしめさるなにかいまはおしむへきよはひ
にも侍らすなからむのちにこのとまり給はん宮たちをと
ふらはせ給はんのみこそうれしき事には思ふ給へき兵部卿
宮はいまはさりともしいたつらにはなさせ給はしと御心さし
の程もたのもしくおもふ給へ侍れはいと心やすうなりて
侍り入道の宮こそこの世をわかれん事ももろともにと
おほしねかひ又みつからもと、めむは心くるしき事におもひ
給へれとつるにはそのおもひもたかひぬへきに侍める
をおほしをこたらすとふらはせ給へおほやけにならせ給
ては中／＼かやうにさひしきやとおほしやらんことはかた

「（三九丁ウ）

こそ侍れと御心の程を見きて侍れはたのもしくなむ
くらゐをさらせ給てもこゝをあらさてかならずすみ給へ
なと申をかせ給へはなに事もおほしをきてむにたかへ
させ給ましきよしをきこえさせ給にくれぬれはかへらせ
たまひなんとて入道の宮のおはしますなかへたてのしやう
しくちによらせ給て御あふきをすこしならさせ給へは
中納言のすけき、つけてまいりたるもむかし的心ち
せさせ給ていと、物あはれなりこゝのへの宮つかへ
のむけにをろかなるもこの比はいとことはりとみゆる
野へのけしきかなとのたまはせてかゝるつゐてなとに

「（一四〇丁オ）

みつからきこえさせては又いつかはとれいの心つくしなる
御けしきもめつらしくてまいりてきこえさすればつね
よりも物おほしみたるゝころにてなに事をかはきこゆへ
からんとてうこかせ給はぬを院もきかせ給てみつから
猶きこえさせ給へ人つてにはあるましき事なりと御
せうそこあればいとういしくつゝ、ましかれとやかてお
はしますところちかき程なればすこしよらせ給へるを
さにやとおほゆる御にほひのうちかほりたるもまたな
らはせ給はさりつることなれば心さはきしてうれしきに
むねさへおとろしくなるも人わろき御心なりいまは

「（一四〇丁ウ）

いかてかけしきも見えたてまつらてかゝるかたに
つけても見なをされたてまつるわさもかな思ひいふにも
かひあるへき御さまにもあらぬ物をなとしめておほし
なくさめつゝ、この御心ちのことなどをすくよかにきこえな
させ給へはけにかたはらいたくきゝくるしき事には
あらねとはかしくいらへきこえさすへきこともおほえ
させ給はねはた、うちなけかせ給へるもあやしくなへ
てならず物あはれけに心くるしき御けはひなを人よりは
ことにおほさるゝをかくしなしたてまつりけんよとおほ
しつゝ、くるにそしのひかへさせ給つる涙もりいてさせ

「（一四一丁オ）

給ひぬるあさましくおほつかなき御もてなしをおもへは
すへて身よりほかにつらき人なれば猶いかてとくあら
ぬところもかなとねかひ侍もいさやさてもかくうき物に
おほしはてられなからいつくにもありかたくや後の世も
いたつらとかやなし侍らむこそいみじけれしにもせしとかま
ことに身をおもひ給へわひにたれ

消えはてゝかはねはいになりぬともこひのけふりは
たちもはなれしとの給はするまゝにみすのうちにからは
いらせ給て御そのつまを引よせてなきかけさせたまふ涙
のしつくとところせさもおそろしくわりなきに院の

「（一四一丁ウ）

御かたより道たとしからぬ程にかへらせ給ひぬみたり

心ちもいまなむきえはへるやうに思ひ給へらるゝときこ
えさせ給へるをきかせ給御心ちとも御さまにみた
れて物もおほえさせ給はぬに右大將まいり給ひて

御こしよせたるさまそうし給へはいてさせ給ふ御心ち

中へおほつかなくてすくさせ給ひし月ころよりも
あかす哀におほしめされて御こしにもたてまつりや
らす御まへの花さかりにさきみたれて夕露をもた
けにひもときわたしたる色へいつともなく見をき
かたきなかにをみなへしの人のみるこゝとやくるし

「（一四二丁オ）

からん霧のたえまわりなけるけしきにてたち
かくれたるはなをいとすきかたおほしめさる

たち帰りおらてすきうきをみなへし猶やすらはむ

霧のまかきにとなかめいらせ給へる御かたちの

ゆふはへなをいとかるためしはあらしと見えさせ

給へるによとゝもに物をのみおほしてすき給ひぬる

こそいかなりけるさきの世の契にかとこそ見え給へれ

「（一四二丁ウ）

（朱長方印）「（一四三丁オ）

（白紙）

此狭衣全部四帖「元斎寿三

借予本書写畢外題所望之

次加奥書也

天正廿年桃花之節後

當于

法橋紹巴（花押）「（一四三丁ウ）

大閤大相国朝鮮国御征伐之

時張陣於肥之名護屋者春

月也今茲季秋廿五日詣西府之

天満宮維持幸而有連歌一千

句之雅会不顧愚昧陪席末実為「（一四四丁オ）

神助也此狭衣全部四冊在洛陽借

臨江老人秘本雖瞻写之當社一乱以来

作灰燼故別当信寛態求也仍奉

納之而後代留予名於此廟者榮之又榮也

越後木戸元斎

天正二十稔菊月廿五日 寿三（花押）「（一四四丁ウ）

（遊紙一丁）

（後見返し・裏表紙）

（以上）

（こばやし・ただまさ 本学大学院博士後期課程

／日本學術振興會特別研究員）